



手際よく炭俵を作る鈴木さん（右）。生徒たちも初めての作業に挑戦です。

伝統をつなぎたい 角館高校の生徒が炭俵作り

毎年2月に五穀豊穡や無病息災など1年の無事を願う行われる小正月行事「角館火振りかまくら」。12月17日、いくつもの火の輪ができ幻想的な光景を作り出すその炭俵作りは角館高校の3年生14人が挑戦しました。

この日は、実際に炭俵を作っている鈴木幸雄さんが角館高校を訪れ生徒たちに指導しました。火をつけて振り回す炭俵は長年、角館町の中川地区の皆さんが作ってきたが、近年は高齢化もあり作り手が減少し、炭俵の確保が難しくなっています。今回の炭俵作りは、これまで2月13日に行われていた桜並木駐車場での開催がなくなった背景もあり、角館高校の生徒が角館火振りかまくらを盛り



最後に振り回すための縄をつけて完成！

炭俵の作り方はコチラから↓↓



URL <https://youtu.be/DtjASWoNAxE>



左から上卒田集落会の眞崎誠幸副会長、川合藤夫前会長、石橋臣平会長、眞崎靖弘副会長。

秋の褒章 緑綬褒章 （社会奉仕活動功績）

令和元年秋の褒章で上卒田集落会が緑綬褒章を受章されました。

上卒田集落会

この度、令和元年秋の褒章で上卒田集落会（石橋臣平会長）が緑綬褒章を受章し、12月20日、役員の皆さんが市役所田沢湖庁舎に報告に訪れました。上卒田集落会は、昭和53年から現在よりも人が多く賑わっていたJR田沢湖線・神代駅の清掃を始め、時代の移り変わりとともに当時よりも利用者には減っているものの、今日に至るまで駅舎やホームの清掃などの活動を続けてきました。長年にわたる駅の環境美化に大きく貢献されたことが認められ、今回の栄えある受章となりました。

母校に恩返し

西宮組が西明寺小・中学校へ寄贈

12月19日、株式会社西宮組（西宮幸実社長）が今までお世話になった母校に恩返しをしようと、西明寺小学校に屋外用の音響機材、西明寺中学校にオイルヒーターを寄贈しました。当日は、西宮優太専務取締役から西明寺小学校の富樫弥恵子校長と西明寺中学校の布谷英司校長にそれぞれ手渡されました。西明寺小学校ではこれまで地域の方から借りていましたが、今後は寄贈された音響機材を活用し、学校の活動に活かす予定です。また、西明寺中学校は、生徒たちが寒い体育館でもより快適に学校生活を送ることができるようオイルヒーターを使用していく予定です。



熊谷教育長（右）立ち会いのもと、西宮組の西宮優太専務取締役（左）から西明寺小学校の富樫弥恵子校長（中央）に音響機材が手渡されました。



西明寺中学校では、布谷英司校長（中央）にオイルヒーターが手渡されました。

百寿

おめでとうございます

12月15日、松崎スエノさん（田沢湖生保内）が100歳の誕生日を迎えられ、『ショートステイ田沢湖』でお祝いが行われました。当日は、家族の皆さんが集まり、仙北市からお祝いと花束が贈呈されました。



中央がスエノさん。

1年の始まりに

しめ飾り作り教室

12月14日、紙風船館で公民館講座しめ飾り作り教室が開催されました。先生は、卓越した技能をもつ方が認定される「せんぼくふるさとマイスター」で、長年にわたり細工を制作している藤原イマさん。参加した20人は、先生から聞いた、隣の人と教えあつたりしながら、一人ひとり大きさや形が違う自分だけのしめ飾りを作り上げました。

参加した皆さんは、「飾るのが楽しみ」「最初の縄ないが難しかった」「自分で作ったものは最高」などと完成したしめ飾りに嬉しそうでした。また先生の藤原さんも「みんな上手にできていた。教えるほうも楽しかった」と話しました。



藤原さん（右）から作り方を教わる参加者。

交流深める 台湾の高校生と角館高校の生徒が交流

12月18日から20日にかけて台湾の台北市にある台湾国立師範大学附属高級中学（日本でいう高校）の生徒35人が仙北市を訪れ、市内の農家民宿に宿泊し農山村体験をしました。また、19日には姉妹校である角館高校を訪れ、温かい歓迎を受けました。両校は平成27年に姉妹校提携を結び、お互いの学校を訪問しながら絆を育んできました。学校到着後は英語による学校紹介、郷土芸能の披露、日頃の授業を通じた交流などで親睦を深めていました。



西木総合開発センターでは台湾の生徒（左）と農家民宿の方（右）との対面式が行われました。

西木温泉ふれあいプラザクリオン

令和元年度 厚生労働大臣表彰 「食品衛生優良施設」を受賞

この度、西木温泉ふれあいプラザクリオンが、食品衛生の重要性を深く認識し、施設の衛生管理の徹底を図り、他の模範となる施設として厚生労働大臣より「食品衛生優良施設」として表彰されました。



調理スタッフの皆さん。

全国中学生人権作文コンテスト秋田県大会

宮本春菜さん(神代中2年)が最優秀賞に

第39回全国中学生人権作文コンテスト秋田県大会で神代中学校2年の宮本春菜さんが最優秀賞(秋田県教育委員会教育長賞)を受賞しました。県内の中学校94校から3536点の作品の応募があり、そのうち最優秀賞は4点選ばれました。あわせて、多数の作品を応募したことにより神代中学校が感謝状をいただきました。

宮本さんの作品は、「アイヌ民族についてふれた「誇りをもって生きる」」。北海道の名付け親である松浦武四郎とアイヌ民族との心の交流を描いた劇団わらび座のミュージカル「松浦武四郎〜カイ・大地との約束〜」を見たあとに、実際にアイヌ民族と会って話す機会があり、作文のテーマを決めたそうです。会っ



最優秀賞に輝いた宮本春菜さん(右)と感謝状を受け取った本元哲校長(左)。

て一番聞きたかったことは「自分がアイヌに生まれてよかったのか」。子どもの頃にいじめられたり差別があつて嫌だと思つて一方自分たちの文化に誇りをもっている姿に魅力を感じたそうです。 今回の受賞に宮本さんは「実際に会った人たちが話してくれたから今回の賞を受賞できた。ありがとう」と感謝の気持ちを伝えた」と話しました。

宮本春菜さんの作文を全文(原文のまま)ご紹介いたします。

「誇りを持って生きる」 宮本春菜

「自分とちがう人」に対する恐れや偏見。おそらく、だれにでもある負の感情だ。 私が初めて「アイヌ民族」を知ったのは中学1年生の夏だった。知るきっかけとなったのは、私の地元にある劇団「わらび座」の公演、「松浦武四郎〜カイ・大地との約束〜」だ。

この作品は武四郎が蝦夷地に渡るころから始まる。その中でアイヌ民族と出会い、知恵やたくましい生き方、言語、文化を知る。一方で、和人からの支配やひどい差別を受けていることも知るのであった。武四郎はそんなアイヌを守ろうとした。時代は江戸末期から明治へ移り変わり、アイヌに対する考え方がより厳しくなつていった。武四郎はアイヌの言葉、風習、文化など様々なことをただ書き記すことしかできなかった。

私はこのミュージカルを見、

て、アイヌ民族をはじめ知るとともに、私が、「自分とちがう人」に対して差別意識を持っていることに気づかされた。そう思うと今までの自分が恥ずかしく思えた。かつての私の考えは、このミュージカルに出てくる和人の考え方と似ているからだ。実際に行動にしまなくても、そう思っていることが恥ずかしいと思つた。

私は、この作品を見てから「アイヌ民族」にとても興味を持つようになった。その一つはアイヌ特有の文様だ。舞台上で役者さんが着ていた衣装を見て、少し不思議で、美しいと感じた。

それから1年が経った。1年生の頃の気持ちに変わりはなかった。むしろ「アイヌのことをもっと深く知りたい」と思うようになっていた。あのミュージカルを見てからアイヌのことが忘れられなくなつていった。「アイヌの人と実際に会って話したい」と心の中で強く思つた。

実戦空手道武心会

第3回WKOジャパンスリットカップ本大会出場へ

各選抜指定大会の優勝者・準優勝者のみが出場できる第3回WKOジャパンスリットカップ本大会に実戦空手道武心会の4人の選手が出場権を獲得しました。



左から実戦空手道武心会師範代の田川悟さん、高橋凜さん、新田悠仁さん、佐々木雄さん、岩田晴さん、門脇市長。

- 出場選手(敬称略)と意気込みをご紹介します。
小学3年女子 高橋凜(西明寺小3年・空手歴5年) 第23回全東北空手道選手権大会 準優勝
「前回の試合で後ろに下がってしまったので、下がらないように頑張りたい」
小学4年男子重量級 佐々木雄(角館小4年・空手歴6年) 2019東北ジュニア空手道選手権大会 優勝
「去年は1回戦で負けてしまった。今年は優勝できるように頑張りたい」
小学4年男子重量級 新田悠仁(角館小4年・空手歴4年) 同大会 準優勝
「今まで練習してきたことを出して優勝したい」
中学男子軽量級 岩田晴(角館中2年・空手歴8年) 同大会 準優勝
「前回の大会では怪我で出場できなかった。その悔しさを晴らして優勝したい」

7月。私はアイヌの人と会う機会に恵まれた。それは、アイヌの踊りのワークショップだった。私はすぐに行くことを決めた。「やっと会えるんだ」そう思うととてもワクワクした。 ついにその日。ドアを開けると、衣装を着たアイヌの方々が「イランカラプテ」と温かく迎えてくれた。イランカラプテとは「こんにちは」という意味だ。実際に会ってみるとなんだか少し緊張した。いよいよワークショップがスタート。思っていた以上に難しかった。でも近くで踊っていたアイヌの方がいねいに教えてくれた。だんだんと緊張もほぐれた。このワークショップに來たアイヌの方々は東京オリンピックに向けてアイヌ民族の存在感を高めようと活動しているそうだ。最初は慣れない動きに戸惑つたが踊り終わったあとは達成感の方が勝つていた。 その日の夜。ワークショップに來ていたアイヌの方々と一緒にご飯を食べた。皆さんと色々な話をした。恋愛・好きなこと・ニホンなど。そん

な、私たちが普段話すようなことを話した。その時は気づいた。「見た目は少しちがうところがあるけれど、本当に優しく、面白くて、話しやすい。何もかも私たちと同じだ」ということに。今日会うのが初めてなのにとても仲良くなれた気がした。私はずっと気になつていたことを聞いてみた。それは「自分はアイヌに生まれて良かったと思つているのか」ということだ。 「子供の頃は嫌だった。「あ、アイヌだ」と言つてからかわれたり、毛深いことがきっかけでいじめられていた。いじめられるのは嫌だったけどアイヌの歌や踊りが好きだから受け入れることができた。だから自分の子供にも大切にしたい。普通にごにでもいるような人に見えるけど心の中に嫌な思いがあつて、それは簡単には忘れられない」

でも、私はアイヌ文化がとても魅力的なものだと感じている。それは、私が接したアイヌの方々がとても強く、自分たちの文化を誇りに思っている姿そのものが魅力的だからだ。 人だから色々な負の感情を持つことは当たり前だ。でも偏見によって傷ついている人がいることを忘れてはいけない。世界には色々な人種や民族、障害を持つ人がいる。つまりみんなが同じなわけではない。人はすぐに何でも思いこみで決めつけようとする。でも、イメージだけで悪く言ったり、判断したりしてはいけない。まずその人や文化を知ろうとすること。これがスタートだ。難しいことかもしれないけれど、その「心」や姿勢が大切だ。 私は「アイヌの方々と出会えて良かった」と心から思う。アイヌ文化を知ってもらいたいと強く思う。アイヌの方々が持つたくましさがあまじい。私はアイヌ文化が大好きだ。